
繋がる絆

結城由良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

繋がる絆

【Nコード】

N1282P

【作者名】

結城由良

【あらすじ】

見習い魔術師の少女アイラは、2級から1級へ昇格するための実技試験を受けるため、水の塔を訪れた。1級になれば、専門を学び、見習いから正式な魔術師になることができる。訪れた水の塔で彼女を出迎えたのは、「残念すぎる美青年」という二つ名を持つ水の塔の長ルシウスだった。つかみどころがなく突拍子のないルシウスに振りまわされるアイラの明日はどっちだ。ありがちなファンタジー世界での健気な少女の奮闘もの…のはずが、残念な人に乗っ取られて中身が変わったので、題名を変更しました。

残念すぎる美青年（前書き）

三題噺「見習い魔術師の少女」「魔術師の杖」「魔術師の島」を使って適当に書き始めたので、作者にも行方がわかりません！

うは、データ整理してて、「魔術師の島」と書くべきところを「魔術師の塔」と書いてしまっていたことを発見>>
すんませんすんません。

修正しますた（2011/08/18）。

残念すぎる美青年

くすんだ赤茶の髪と茶色の瞳の少女　アイラは、その小さな16歳という彼女の年齢にしては少々未発達なそれをかなり気にしていた　胸を不安と期待でどきどきさせて、石でできた通路を急いでいた。走るの禁止されているので、できるかぎり早足で。

いくつかの角を曲がり、通常は彼女のような見習い魔術師が来ることはない区画に入る。この区画は、しんと静まり返っていており、空気が重い。見習いのおぼろげな感覚でも、ぴりぴりとした魔力の圧力を感じる、そこはそんな場所だった。

その圧力に幾分顔をこわばらせつつ、ひとつの大きな扉の前で止まる。がっしりと重厚な、楔でできた扉、そこについたノックカーに恐る恐る触れ、こんこん、とノックをした。

開いています。お入りなさい。

中から響く声　それは心に直接響く「心話」であったのだがに、アイラはびくびくしつつ、扉を開けた。その重そうな外観にもかかわらず、扉は軽々と開いた。

部屋の主は、書類から顔を上げ、おずおずと扉から入ってきた少女を見て、顔をほころばす。なんというか、おびえる小動物のようで、かわいい。そう思った主であったが、その感想は心にしまっておいて、やさしく問いかけた。

「見習い魔術師2級のアイラ、ですね？」

「は、はい！」

しかし、なるべく優しくした声音にもかかわらず、少女はしゃちほこばって、答える声も裏返っている。主の笑みが苦笑になった。

「楽しんでください。今回は昇級筆記試験合格おめでとう」

「あ、ありがとうございます！」

とはいえ、そのアイラの反応は主　この水の塔の長であり、世界でも数少ないS級魔術師であるルシウスを前にしては、無理もない反応とも言える。目を白黒させて、ぐるぐるしているアイラをこれ以上追い詰めてもかわいそうと思ったか、ルシウスは事務処理を進めることにした。

「アイラさん、これからあなたには昇級実技試験に挑戦していただきます。期限は3日。銀の月15の日正午までに、あなたがこれから使う魔術師の杖を確保してきてください」

言い渡された課題にアイラの表情が引き締まった。

／＊／

ルーシャジア大陸の西側近海に浮かぶ「魔術師の島」には、五大要素（火、土、木、水、風）のそれぞれを専門とする5つの魔術師の塔がある。今回見習い魔術師1級への昇級を受けるにあたって、アイラはその適性から水の塔へ向かわされた。3級、2級と基礎と汎用の魔術を学んできたが、1級からは適性を考慮した専門化が進んでいく。所属も、初心者から各塔へ移される。昇級試験に合格すれば。

昇級試験に決まった時期はない。何しろ魔術師の適性を持つもの

は少なく、また3級から2級と進んでくるものも多くはない。見習いとはいえ2級を修められたというだけでも、貴重な存在なのである。そのため、本人が準備ができたと思えば、指導魔術師メンターに申し出て、随時受けることができる。昇級試験としては、筆記試験が5科目に、実技試験1科目が課せられていた。アイラは3日にわたる筆記試験をなんとかクリアして、実技試験の課題を受け取りに来たのであった。

「魔術師の杖、ですか」

「そう。これまでの基礎汎用魔法の杖では、これからの専門魔法の行使には魔力ロスが多くなるからね。水系魔術に特化した魔術師の杖を用意しておいたほうがいい」

呟くように反復したアイラの言葉に、ルシウスはうなずき、説明を加えた。

「つまり、水系魔法の増幅効果があるものが望ましい、と」「そういうことだね」

よくできました、というようににっこりと微笑むルシウスに、アイラはそばかすの残る頬をぱあっと染めた。絹糸のような金の髪に整った容姿のルシウスの微笑は、特に男性経験の少ない少女にとっては殺人的である。

「水系魔法の増幅効果の強度が高ければ高いほど、評価も高くなる、と思ってくれてかまわない」

「……わかりました。製法や材料についての制限はありますでしょうか？」

「材料としては基本的にこちらで用意してあるものを使用してもらう。製法に関しては特に制限はないが、水の塔の第三実習室を使用

すること。設備としては、今までのものと同等以上のものだと思うよ。材料もそこに置いてある。鍵はこれだね」

すい、と近づくと、アイラの手をとり、ルシウスは手に持っていた鍵をそこに握らせた。

「……………!!!」

声にならない悲鳴（？）をあげてのけぞるアイラに、ルシウスはいたずらっぽく笑ってみせた。

「行き方は鍵に記録してある。使い方はわかるね？」

「わっわかりまっ!!!」

アイラは撃沈した。

／＊／

心臓に悪い！悪すぎる!!!

まさしく文字通りよろけながら、ルシウスの執務室を辞去してきたアイラは、通路でひとしきりゼーはーゼーはーと息を荒くしながら文句を呟いていた。ただでさえ、S級魔術師の威圧に負けそうなのに、あののほほんとした美貌は反則である。「自覚のない女殺し」「残念すぎる美青年」など、主に女性魔術師の間で囁かれるルシウスの2つ名をしみじみと実感したアイラであった。

とはいえ、ずっとそこで萎えているわけにもいかない。3日時間があるとはいえ、準備なども考えるとおちおちしてられない。アイラはため息をつきながら、渡された鍵 装飾のついた10cm

程度の棒を正面にかざして、呪文を唱えた。

導線現出

鍵に籠められた呪文が発動し、その鍵が開けるべき扉までの道筋が淡く輝く線として空中に出現した。それを辿っていけば、第三実習室までに行けるだろう。

はあ、

と、もう一度大きなため息をついた後、頭をぶるつと振ったアイラは色々忘れることにして、足を踏み出した。

「ため息をつくとき幸せが逃げちゃうんだゾ？」

その様子を 第三の眼 で見るともなく見ていたルシウスが、にやにやしながら呟いたなどということは、アイラに知る由もなかった。

残念すぎる美青年（後書き）

ルビの振り方修正。

タイトル修正。

2011/08/18

美男子 美青年に統一（たぶんどうでもいいけど気になった）

心臓に悪い食事会（前書き）

残念な美青年が相変わらず爆走中で、アイラが苦労人と化しつつあります。着地点はなぞです。明日はどっちだ。

心臓に悪い食事会

「材料ってどこにあるの？」

ルシウスの執務室から3階層ほど下の中層区にある第三実習室にたどり着いたアイラは、きよろきよろと中を見回して戸惑っていた。

実習室そのものは、これまでアイラが所属していた初学者の塔のものとはほぼ同じである。前に指導教員が説明をおこなう黒板と教壇があり、その前に魔法陣を描くための空間が確保されてある。さらに、その後ろに6人程度が困めて小規模の魔法陣なら描ける作業机が4つほど置いてあった。

「アイテム練成の魔法陣はここに書くとして、材料がないと…」

誰もいない実習室は静まり返っており、その広さが心細さを誘う。時間は昼下がり。明り取りの窓から日光が射し込んではいるものの、窓自体がそれほど大きくはないため、薄暗い。うろつろつと用意されているという材料を探していると、教卓の上にあるメモに気がついた。拾って読む。

『材料は、準備室の倉庫から適当に見繕うこと』

「…用意ってそういうことですか」

アイラはそのアバウトさにがっくりと肩を落とした。

／＊／

マジックアイテムの練成には、複数の材料が必要である。まずは

素材と呼ばれる、魔法を付与する器となるものがなければ始まらない。今回は杖ということなので、杖となる長さの棒が必要である。付与する魔法との相性を考えてその素材は選ばれなければならない。

「えーっと、棒、棒：ハムネの木があるといいんだけど。さすがに、ファスコス鋼はないだろうし…」

杖といっても指揮棒のような「ワンド」なので、それっぽい棒を実習室隣接の準備室付属倉庫からいくつか掘り出して並べていく。軽く魔力を流してみても、その手ごたえから材質を推測するのだが、とりあえずは目視で掘り出していく。まあ、目視といっても緩やかな探索魔法はかけているので、雑然とした中から比較的早く探し出せているほうではある。

「それから、できれば水結晶が欲しいなあ」

棒自体に文様を刻み込むなどで魔力を籠めることは可能であるが、できればより効率よく魔法を定着できる魔結晶が欲しい。特に、属性と相性のいいものが望ましい。

「うわ、あった！」

サンプルだろうか、非常に小粒のものであるが、水属性の魔結晶（略して水結晶）を見つけて、アイラは喜びの声を上げた。

「後は、触媒、触媒…」

そのほかアイテム合成に必要ないくつかの材料を見繕って、ようやくなんとかかなりそうな目処が立った頃にはもうすっかり日が暮れていた。

(だいたい揃ったし、続きは明日にしよう)

材料の選別と最終チェック、魔法陣の用意は明日にすることに
して、アイラは第三実習室を出ようとして…固まった。

「な…っ」

驚きの余り声が出ない。凝視した相手は、そんなアイラににこにこ笑いかけていた。

「やあ、お疲れ様。晩御飯でも一緒にいかが？」

アイラは、残念すぎる美青年ことルシウスのその言葉に卒倒し
うになった。

／＊／

「えーなんでわたしはこんなところでルシウス様と晩御飯を食べて
るのでしょっか」

緊張の余り味を感じなくなるといふ言い回して真実だったんだ
わ、と第三者的な感想を抱きつつ、誰に言うともなく呟くアイラ。
連れて行かれた店は、「魔術師の島」でももっとも高級とされるレ
ストランで、高そうなコース料理であるにも関わらず、味わうどこ
ろの騒ぎではなかった。

「それは僕が誘ったからだね？」

その原因であるルシウスは相変わらずににこしながら、食事を

片付けている。そのテーブルマナーは、「絵になる」とはこういうことかと言いたくなるほど優美である。

「えーっと、なぜルシウス様が私のようなものを誘われたのでしょうか」

アイラは疲れてきたのでダイレクトに聞いてみることにした。S級魔術師で水の塔の長がなぜ、一介の見習い魔術師にかまうのかが理解できない。

「んーかわいいから?」

アイラが盛大にフォークとナイフを突っ込んだせいで、皿に載った鶏肉が30cmほど吹っ飛んだ…と思ったら、床に落ちる前にルシウスの指鳴らしで元の位置に収まった。そばに立っていた給仕の男性は、さすが高級店だけあって(?!)、見ていたはずなのに眉すら動かさない。

「いや、ごめんごめん。まあそれもあるけど、僕、実技試験の監督官なんだよね。言い忘れててごめんね」

あるのかよ!と心で突っ込みつつ、その後の言葉が浸透して行くに従って、アイラの目が大きく見開かれた。

「ええええええ!」

ルシウスいわく、実技試験中の見習い魔術師の健康管理も監督官の仕事のうちらしい。健康管理と言えばおいしいものを食べて、よく寝ることだね、と、相変わらず輝くような笑顔でのたまわれると、反論もしようもない。

（そばにいただけで、心臓が悪くて死にそうなんです！！！）

叫びそうになった言葉を飲み込んで、この拷問のような時間をさっさと終わらせるべく、料理を片付けることにしたアイラであった。

心臓に悪い食事会（後書き）

2011/08/18 修正：魔方陣 魔法陣（1力所）

昇級試験2日目(前書き)

ルシウス仕事しろ！

昇級試験2日目

「…ずいぶんとご機嫌なようですね」

にやにやとにこにこの間の表情を浮かべるルシウスに、女性が幾分あきれた色をにじませた声をかけた。

「そう?」

本人に自覚はないらしい。

「第三の眼 で監視中ですか?」

神秘的な紫の瞳で空中に漂う魔力の波動を眺めて、女性 長の補佐官を務めるA級魔術師マリエルが尋ねる。腰まで伸びた長い紺色に近い青の髪が、首を傾げると揺れる。第三の眼 は基礎魔法のひとつで、近距離に視覚を飛ばす魔法である。属性は風であるが、難易度は視点を置く場所への距離に比例する。

「うん、なかなか面白いね」

「面白い、ですか?」

補佐官としては、持ってきた書類をさっさと裁いて欲しいのだが、ルシウスの注意は3層下の第三実習室にあるらしい。

「うん、ラウルを思い出す」

「どなたですか、それは?」

聞き覚えがない名前にマリエルが首を傾げると、いや人じゃなく

てパウチーなんだけどね、とルシウスが言ったので絶句した。パウチーというのは、赤茶色の毛並みをした全長20cmくらいの小動物である。

「いやー昔家で飼ってたね。あのつぶらな瞳を見ると思い出すんだよねえ」

「…それは本人に言わないでくださいね」

え、なんで？と首を傾げるルシウスに殺意を覚える。なんでこの人は顔も頭もいいのにこんなに残念なんだろう。叩いたら治るかしら、と手にした杖を弄フシトんでいると、ルシウスがお、と言う感じで空中を見た。

「幾分戸惑いながらも順調に準備を進めてるね」

ほう、とマリエルは受験者アイラの試験結果を記憶から掘り出した。

「筆記試験の結果も悪くはないですね」

でも、と先を続ける。

「ルシウス様おん自ら監督官をされるほどの者ではないのでは？」

おかげで書類が溜まって困る、と整った眉の片方を上げる。

「書類がめんどくさ…げぶんげぶん。いや、僕が買って出たのにはそれなりに理由がだね…」

「理由？それは、」

…昔のペットに似てるからだけじゃなくて？ と続けようとした瞬間、ルシウスの表情が硬くなった。

「いかん！」

一瞬遅れて事態に気がついたマリエルもさつと顔を青ざめた。

／＊／

時は少々遡る。

アイラは、雑念を振り払いながら、昨日の続きである材料の選別から始めていた。昨日は思わぬ大物との接触で気が動転したが、1日明けてだいぶ落ち着いていた。なぜ水の塔の長が自分の監督官なのか、余りに驚きすぎて訊くこともできなかったが、昇級試験の仕組みをそれほど詳しく知るわけでもないアイラにはそれ以上追求しても仕方のないことではあった。

監督官は不正や事故のないように受験者を見守るのが仕事だと、簡単に説明された。つまり、今もどこからか監視されてるということだ。見習いであるアイラにはまだ探知することはできなかったが、漠然とした気配に居心地が悪く身じろぎした。

そのミスをしてしまったのは、重なる緊張のせいだったろうか。

マジックアイテム練成用の魔法陣、床に緻密に描かれたそれに、一箇所だけ文字の書き損じがあった。それはほんとにささやかなミス。だが、魔法を使う者にとっては致命的なミス。

気づかぬまま、魔法陣の中央に材料を置き、魔力を流し込む。そ

れは、短い時間で済むはずの簡単な練成。だが、魔力は材料に集結せず、魔法陣の上で渦を巻き始めた。

「と、止まらない!!!」

ルシウスが気がついたのが、その瞬間だった。

／＊／

魔力の荒れ狂う亜空間。第三実習室の扉を開けたルシウスは、その状況を見て舌打ちをした。

実習室の壁にはこうした事故に備えて、対魔法の魔法が刻み込んでいる。その壁がみしみしと軋みを上げている。長くは持ちそうにない。

「 解説 」

どこからともなく取り出した杖を掲げると、ルシウスは魔法を解体する魔法をそこにロードし、起動呪文を詠唱した。

／＊／

遠くで誰かが呼んでいる。

お母さん？

そう呼んでいた人の胸に抱かれたのは何時のことだったか。

(気味の悪い子)

私が水の玉をたくさん作って遊んでたのを見たとき、その人の顔がゆがんだ。

（あの子がここにいるのは怖いのよ）

吐き捨てるように父と呼んでいた人に言うその人の言葉が、胸に突き刺さる。

私はお母さんのところにはいけなかったの？

生まれてきてはいけなかったの？

「おかあさ…」

「アイラ、アイラ、大丈夫か？」

呼びかける声は、低く暖かだった。目をつつすらと開けると、まだ余り慣れない美貌が目に入ってきて…それでもなぜか安心できて…意識がすつつと遠のいた。

／＊／

一旦意識を取り戻したものの、再び気を失ったアイラを見て、ルシウスはちつと舌打ちをした。抱え上げ、遅れて駆けつけてきたマリエルに指示を放つ。

「魔力が枯渇寸前で危険だ！治療の準備を！」

マリエルは頷いて答えた。

「手配済みです。こちらへ」

駆けつけるのが遅れたのはその手配をしていたせいだった。

「助かる」

礼を言いつつ走るルシウスが治療室にたどり着いたとき、呼ばれた治療師も駆けつけたところだった。

昇級試験2日目(後書き)

入れ忘れていた、ルシウスのペットエピソード入れました。

魔術師の島（前書き）

シリアス展開になってしまいました（、・、・、）。

魔術師の島

押し込めていた記憶、忘れたつもりでいた痛み。でも、思い出してしまった。

／＊／

アイラが「魔術師の島」へやってきたのは、数えて10になった年だった。なにかれとなく彼女に気を配ってくれていた祖母が死に半ば親に売られるようにしてやってきたのだった。売られる。それは、貴重な才能の確保には投資を惜しまない「魔術師の島」からの資金提供を意味していた。今でも彼女がここにいるために、「魔術師の島」は彼らに資金提供を続けている。

彼ら　気の弱い父と、彼女を嫌悪の目でしか見ない母、そして彼女には与えられない愛情を与えられた弟と妹。

それでもまだ、別の場所へ売られるよりはいいのだと、自分を慰めてきた。ここでもならば学べる。成長を、成果を出すことを期待されている。彼女の才能　魔術師としての素養だけだったけれど、求められている。

だから生きられる、生きていてもいいと思える。

だけど、もし、魔法が使えなくなったら？

暗闇の中で、凍てつくような恐怖にのど元を掴まれて、アイラは立ち尽くした。

魔術師としての才能は血統に出る。両方が魔術師である親から生まれれば、素質の強弱はあっても、魔術師の才を持つ。

魔術師の才のない者と魔術師の間の子供に魔術師の才があるものは半数。世代を経ればその確率はもっと下がる。

アイラは父方の曾祖母が魔術師であるという、いわゆる先祖がえりの子供であった。

時代が違えば、曾祖母の時代であれば、もっと魔術師というものが受け入れられたかもしれない。

だが、アイラが生まれたこの時代 先の大戦で魔術師が戦略兵器として用いられ、その被害が世界規模におよんだその爪あとからの復興にもがいているこの時代には、魔術師は恐ろしいものと認識されていた。

個ではとても魔術師には勝てない一般人も、衆を頼めば強い。あるいは、いかな力の強い魔術師といえど、完全に孤立しては生きられない。人間である限り、つながりを求める限り、孤立しては生きられない。

先の大戦後、各国の保護を得られなかった魔術師の中には追われて狩られたものもいた。国の保護を受けられた魔術師も、兵器として不当に扱われるものも多かった。自由を制限され、人殺しを押し付けられる。そんな暮らしの中で心を病んで命を絶つものも後を絶たなかった。

かつては多数とは言わないまでもそれなりの数いた魔術師が激減したのは、そんな事情からであった。

そのような現状を憂い、立ち上がって仲間を集め、「魔術師の島」を作ったのが、塔主会議の先代議長アル・クラインだった。彼はその絶対的な魔力と外交力で多数の国を相手に、魔大陸に対する防衛拠点として作られたこの都市を魔術師の自治地区として勝ち取ったのであった。

それが十数年前。

まだ「魔術師の島」という組織は若く、それゆえ試行錯誤を続けている段階であった。

／＊／

アイラの見習い1級への昇格実技試験は、魔力と体力の回復に安静1週間を要したため、中断・保留扱いとなった。治療師の完治診断をもつて再開という予定であったが、更なるトラブルの発生によって、無期保留となった。

アイラが魔術が使えなくなったのである。

「精神的なものですね」

あの事故の時点からアイラの治療に当たってきた治療師　タイサは、刈り込んで短くしたプラチナブロードの頭を横に振りながら、そう告げた。魔力自体は回復している。切り傷を中心とした外傷も完治している。だが、魔力の暴走に対する恐怖が、心に傷となって残り、魔力の行使を妨げているのだらう、と。

「わたし…わたし…」

アイラの顔が歪む。簡単な 明かり の呪文さえ、使うことができ
ない。空中の魔素を指先に集めて光素へ変換する、ただそれだけ
のことなのに。前は、息をするよりも簡単にできていたことなのに。
体の中の魔力を集めて操作しようとする、何かに阻まれる。怖い。

「無理にがんばろうとしないほうがいいです。焦らないで。今はま
だ心に深い傷が残ってますから、まずはそれを治すことを考えまし
ょう」

タイサが慰めるのへ、アイラがしがみつく。

「治りますか？わたし…また、魔術が使えるようになりますか」
「ええ、きっと…」

しかし、タイサの瞳に浮かんだ色は不安を帯びていた。

魔術師の島（後書き）

誤字修正。

青い空の下で（前書き）

ルシウスの過去回想に行くべきか悩み中。

青い空の下で

澄み渡った青い空を、綿のような雲が流れて行く。

アイラは晴れやかな天気とは裏腹な重苦しい気分で、流れて行く雲をぼうつと眺めていた。

タイサからは完治のお墨付きを得ており、気晴らしの外出を勧められてもいたが、気が進まずにベッドに身を起したままじつと窓から外を眺めている。

思考はぐるぐると同じところをめぐっている。

どうしよう。魔法が使えなくなったら、ここにはいられない。家にはもとより居場所がない。ここからお金が送られなくなったら、あの人はなんて私をなじるのだろうか。帰れない。帰りたくない。でも行く場所がない。

はらはらと、そばかすの浮いた白い肌の上を涙が流れ落ちる。

「あーいつらちゅあああん、あっそびつましょー」

そんな場面に場違いな能天気が入り、空気が、固まった。

涙が強制的に止まり、闖入者を見つめる。

闖入者　ルシウスは両手を大きく広げて、笑顔を貼りつかせたまま、固まっていた。

アイラの視線が、自分の胸元に落ちる。色気はないとはいえ、寝まき。

「きゃああああ」

ルシウスの元からないその手の名誉が更に下がる悲鳴が、建物に響き渡った。

／＊／

建物 下宿用に借り上げられた民家の管理人のおばさんが駆け付け、ルシウスをひっ捕まえて追い出した。その間にアイラに着替えるよう促す。アイラは徐々に外出着に着替えた。女性の部屋にいきなり入るとは何事かとおばさんにひとしきり絞られた後、着替えの終わったアイラのとりなしで、ルシウスは解放された。

「なまっちよろくて頼りなさげだけど、外出するのはいいことだよ。気晴らしに行っておいで」

おばさんも閉じこもってふさぎこんでいるアイラを心配していたらしい。頼りなさげと言われたルシウスはあははーと頭をかく。

「アイラちゃんになんかあったら容赦しないからね。ちゃんと守るんだよ」

「もちろんです」

しかし、ルシウスは気を悪くした様子もなくにこにここと答えた。むしろアイラの方がおばさんの威勢の良すぎる言い方にあわあわとしている。

「夕方までには帰しますので」

「気をつけて行っておいで」

「い、行つてきます」

押し切られる形で外出することになってしまったアイラは、目を白黒させたまま手を引かれて連れて行かれるのだった。

／＊／

「ど、どこまで行くんですか？」

手を引かれているのが恥ずかしいが、振り払うこともできず、微妙に引きぬこうとすると却って強く握られるので、途方に暮れる。そここうしているうちに、街の外周を囲む壁が見えてきて、アイラは行く先を尋ねた。このまま行くと、街の外へ行く門へ出てしまう。

「ん、天気もいいし郊外へピクニック？」

確かに天気はいいけれど…はあ、と力なく答えるアイラに、ルシウスは手に持ったバスケットを掲げながらウインクしてみた。

／＊／

小一時間も歩いただろうか。街から少し離れた小高い丘の上で、ルシウスはバスケットの中身をてきぱきと取りだす。敷き布に、昼食の包みに、飲み物の入った筒。

広げた敷き布の上に腰を下ろすと、包みを開けてその中身を取り出し、アイラに手渡した。

「さすがにもう冷めてるけど、うまいよ」
「ありがとうございます」

穀物の粉を平べったく焼いたシートで、たれをつけて焼いた肉と刻んだ青野菜を巻いた、パンジャというこの付近の郷土料理だ。広場の屋台でよく売っている。焼き立てが一番うまいが、冷めてもそれなりにいける。アイラも買ったことがある中央広場の屋台で買って、包んでもらったのだとルシウスは言った。

ぱくり、と一口食べてみたアイラは、久しぶりに自分がとてもお腹が空いていたことに気がついた。

「おい…しい」

ぱく、ぱく、ぱくぱくぱく。食べ盛りらしさを取り戻して齧りつくアイラを、ルシウスは目を細めて見ていた。

／＊／

食べ終わると飲み物の筒を渡され、それを飲み終わると、沈黙が落ちた。落ちたと言っても、ただルシウスがにこにこしてしゃべらないだけで、居心地の悪いものではない。いや、微妙に落ち着かなくはあるのだが、何をどう切り出していいものかわからない。

日差しは温かく、頬を撫でる風は優しい。

「あの…」
「ん？」

街の方を見るともなく眺めていたルシウスがアイラに視線を戻し

た。なんで、この人はこんなに嬉しそうに私を見るんだろう…：なんか、こつ、落ち着かない。

「その…どうして、わたしみたいなものに親切にしていただけのか、わからなくて」

からかわれてるのか、とも思う。田舎者の小娘、魔術師の塔にはあまりいない物珍しいおもちゃ。だが、返ってきた答えは予想外のものだった。

「んー恩返し？」

「はあ？」

記憶を掘り返してみるが、思い当たる節がない。確かにアイラは、困ってる老人がいれば手を貸してあげる程度には親切な方ではあるが、こんな派手な人物を助けたことはない。

「わたしには心当たりがありませんが」

「ああ、うん。そりゃそうだろうね。僕を助けてくれたのは、アイラのひいおばあちゃんだから」

アイラの目がさらに点になった。

ルシウス(1) 悪夢の始まり(前書き)

これから3話ほどちとハード展開になるので、R15と残酷表現ありのタグ追加させてもらいました。グロくはしないつもりですが、苦手な人はすんません。

ルシウス(1) 悪夢の始まり

森の中を獣が駆けて行く。

小柄で、敏捷で、そして傷ついている。

獣は疾る はし 人間になるために…

／＊／

小さい頃、ソレはまだ人間だった。貧しいながらも、小さな村の片隅の小さい家に父母と生まれたばかりの弟と暮らしていた。

それが壊れたのはいつの頃だったか。隣国との間に戦争が起こり、貧しい暮らしが更に苦しくなった。父が兵隊に取られ、畑が荒れた。母が畑を耕し、内職をして食いつないでいたがぎりぎり、まだ幼かった弟は流行病であっさりと死んだ。

ソレも弟と同じ病に倒れ、死にかかっていた。そのまま死んでいた方が良かったかもしれない。だが、母親は必死で助けを求め、どこからか黒い魔術師を連れてきた。

魔術師は母親に問うた 死の別れと生の別れとどちらを選ぶかと。

普通的手段ではこの子供は助からない。特別な手段でなら助かるが、二度と母と子としては会えなくなるだろう。命を救う対価として、子の人生をもらうことになる。そう魔術師は言った。

貧しく生きのびるだけで精いっぱいな母親に選択の余地はなかった。その選択が子にとってどれくらい残酷な運命をもたらすかも知らず、二度と会えなくてもいいから救ってくれと、頼み込んだ。

契約は成立した。黒い魔術師が子に魔法をかけると、子の病は癒えた。涙を流して喜ぶ母親、そして永遠の別れ。子を連れて魔術師は去り、言葉通りその地へ子が戻ることは二度となかった。

/* /

「左翼前方敵騎馬部隊へ 火弾」

戦場の様子を伺っていた前線指揮官は、敵の騎馬部隊が射程距離に入ったことを見て命令した。傍らに立つ黒いローブをまとった魔術師が、ヒトの形をしたソレへ指示を出す。

「4号、左翼前方敵騎馬部隊先頭へ 火弾 投下」

「復唱します。左翼前方敵騎馬部隊先頭へ 火弾 投下」

ソレは感情の籠らぬうつろな声で、魔術師の指示を復唱しながら、両手を命じられた方角へ上げた。やはりうつろな目が目標を捕捉、開いた両の掌にエネルギーが集められる。圧倒的な火力の集中。生み出された高熱の火の玉を、ためらうことなく目標へ向けて射出する。

着弾。閃光。爆発。遅れて届く爆音と爆風。

突撃して来ていた敵の騎馬部隊の前方半数が壊滅し、総崩れとなった敵は撤退を開始した。

「これより掃討戦を開始する。槍部隊、前進して追撃。逃げ遅れた歩兵を狩れ。ただし、深追いはするな。弓部隊および魔術部隊は後方よりこれを援護せよ」

前線指揮官が味方部隊への指示をおこなう中も、ソレは腕を挙げたまま、うつろな目を前方に向けていた。

／＊／

「やあ、すばらしい戦果ですな！パルジャン殿のその人間兵器があれば、今後の連戦連勝も間違いなしですな」

がっはっはと下品な笑い声をあげて、総司令官であるその貴族は、黒ローブの魔術師　パルジャンを賞賛した。陣に張られた天幕で開かれた勝利の祝宴でのことである。人間兵器、と呼ばれたソレは、パルジャンの右斜め後ろに無表情に立ち尽くしている。

「量産化計画の方は、どのような状況ですか？」

その貴族は、パルジャンのパトロンでもあった。パルジャンの研究に必要な資金を提供し、その成果を戦場に投入する。その結果、いくつかの戦いで勝利を修め、貴族は国での立場を強めつつあった。更に戦果を上げれば、より要職に就くことができる。果ては摂政も夢ではないかもしれない。貴族は貪欲に笑った。

「まだ、研究を開始したばかりで、ほとんど進んでませんね。この試作品についても、実験体3つでの失敗の結果、なんとか生き残っただけで、まだ安定するとは言いがたい。量産化については、もうしばらくデータ収集と調整をかけた上で検討させていただきたく」

パルジャンの声はソレに劣らず感情の籠らない淡々としたものであった。

「むう…ですが、おそらく今後も戦争は拡大を続ける見込みです。絶対的な戦力で敵を圧倒し、早期に戦争を終結させるためにも、貴殿の研究の完成を期待しておりますよ」

「わかっております」

人間兵器つまり一般人を施術により攻撃魔法の使える魔術師にする研究　不審な魔術師の持ち込んだ怪しげなそれに出資をしたのは気まぐれのようなものであった。しかし、続く戦争に、疲労し戦うことに厭いた魔術師たちが戦場から離脱、あるいは戦死により失われていくにつれ、その重要性は増しつつあった。

「つきましては、実験体の確保について許可をいただきたく」

「近隣の村から調達していただいてかまいません。トラブルにならないように手配しておきますよ」

宴席にやむなく同席させられ話を聞いていた前線指揮官は、その意味するところを察して顔をしかめた。

続く数日で、その地区の敵兵は壊滅し、駐留部隊を残して本隊は引きあがることとなった。ソレの実戦投入実験は成功を収め、パルジャンはその実験データと近隣の村で確保した実験体を研究施設へ持ち帰ったのだった。

ルシウス(2) チャンス(前書き)

あと1話か2話ルシウス編が続きます。

ルシウス(2) チャンス

『実験体4号 実戦投入実験報告書 記：パルジャン』

光喜歴18年銅の月10日、かねてより計画のあった実戦投入実験を、モンフェス公国との国境での紛争にておこなった。逃亡防止と命令遵守のため、感情除去処置をおこなったが、著しい自律行動の欠如がみられた。摂食・排泄などの生命維持行動にも支障をきたすことから、施術の改良が必要である。

また、感情除去魔法の持続時間は現在のところ5時間程度であり、その効果が完全に消滅する前に重ねがけが必要である。一般人への持続時間が10時間程度はあるのに対し5時間と効果の減衰が早いのは、実験体4号の魔術耐性のためと見られる。

実戦で使用した魔法は、火弾、氷弾、風刃、雷槍、土流。5大要素の代表的な攻撃魔法を網羅することができた。光魔法、闇魔法、無属性魔法については今後の課題である。この5つの魔法の出力的については、実験室での計測の80%は確保できていることを確認した。幾分威力が落ちているのは、感情除去処置の副作用でないかと思われる。

なお、帰還後の感情復活に伴う精神への影響は現時点では予測の範囲内である。実戦を繰り返すことにより、最終的には感情除去処置が必要なくなる可能性もある。経過を観察しつつ調整をおこないたい。

パルジャンは、実験報告書を書く手を止めて、ふっと顔を上げた。敷地に張り巡らせた警戒網に何かが触れた。警戒と調査を命じようと、呼び鈴に手を伸ばす。

爆音が響き、建物が揺れた。

／＊／

ソレ 実験体4号は、牢獄と言ってよいその部屋のベッドにおむけに寝ていた。正確には、暴れたために、四肢をベッドに固定されていた。目は開いている。

心に満ちているのは恐慌。

戦場から部屋に戻され、感情が戻って来るに従い、記憶も蘇ってきた。まるで他人のしたことのように実感のない、だが紛れもなくソレがおこなった非道。

命じられるままに魔力を放ち、敵を 人間を虫けらのように吹き飛ばしていく。

その力が恐ろしかった。感情を奪われることが恐ろしかった。そして、いつの日か行為に慣れ、感情を除去されなくても何も感じなくなる…その予感が、一番恐ろしかった。

恐慌に暴れるソレをパルジャンは淡々とベッドに縛り付け、落ちていたら解除するようにと監視者に指示を出して、去って行った。首と四肢には感情回復前に、魔力を抑える枷が填めてあり、この部屋自体にも強力な魔力抑制の魔法がかけられている。

2重3重の逃亡防止策に、幾度かの挑戦の末、逃亡はあきらめていた。

そう、その時までには。

／＊／

爆音と震える建物に、外の通路がにわか慌ただしくなった。状況を知りたいが、ベッドに縛り付けられた状態ではいかんともしようがない。じりじりと焦れているうちに、外の通路の気配がなくなり、そして、扉が開いた。

扉から姿を現したのはパルジャンだった。

「いったい何が起こってるんですか？」

問いかけに、動揺の特に見られない無感情な目を向けて、パルジャンはそれでも答えた。

「襲撃だ。敵の正体はまだわかってない」

言いながら、ソレの縛めを解く。四肢と首につけた魔力抑制のリングはそのままだ。立つよう促すと、裏口から脱出する、とパルジャンは言った。

手を引かれるようにして、通路を急ぐ。遠くから聞こえてくる爆音は、徐々に減り、そのうち聞こえなくなった。

裏口の扉を開ける。

そこにはすでに敵の部隊が待ち構えていた。

／＊／

「武器を捨て、手を上げていただこう」

10数名の魔術師を背後に待機させた状態で、隊長格らしい男が声をかけた。

パルジャンの手が実験体4号の首に添えられ、パチンと音を立てて、首の魔力抑制リングが解除される。

「おおっと、それ以上動いたら火だるまにしますぜ。こちらとしても無駄な流血は避けたい。手をあげていただけますね？」

「…つまり、抹殺が目的ではない、と」

渋々手をあげながら、パルジャンが問う。

「もちろん、抵抗したりこちらの要求が飲んでいただけない場合は処理するように、とは言われてますがね。賢いパルジャンさまのことだ、そんなことにはならないと思ってますよ」

男が獰猛に笑う。

「この状況では、私に選択肢はなさそうだが」

「ご理解いただけて幸いですな。俺の依頼主どのが、パルジャンどのご相談があるとのことですので、ご同道いただききたい」

「用があるなら正面から申し込んでいただければいいものを」

「あちらさんの手の者がある状況ではいやだ、とおっしゃるものでしてね」

パルジャンと男の間の空気が緩む。

パシン！

その瞬間、何かはじけて砕ける音が響き渡った。

ノ*ノ

それは、ソレにとっての最後のチャンスだった。

男との話がまとまり、部屋に戻されてしまえば…いや、その前に首の魔力抑制リングが戻されてしまえば、逃亡の機会は永遠に失われてしまう。ソレは慎重に時機を伺い、男たちの緊張が緩んだその瞬間、右足首の魔力抑制リングを破壊した。

パルジャンが慌てて首の魔力抑制リングを戻そうとするのを、火属性の小爆発魔法でリングごと弾き飛ばす。次の瞬間、態勢を整え直して放たれた敵部隊の攻撃魔法を、地面を蹴って転がることでやり過ごす。

転がって移動しながら、左足首の魔力抑制リングを破壊。解放された魔力を使い、高速の竜巻を招来する。

「風刃」

態勢が整わなかった敵の数名が切り裂かれ、吹き飛ばされて行くのを目の端で見つつ起きあがり、走る。

走りながら残りの左手首、右手首の魔力抑制リングを順に破壊し

て行く。

「追え！逃すな！捕えろ！」

男のわめき声を背に、ソレは森の中に飛び込んだ。

ルシウス(2) チャンス(後書き)

ちなみに、魔力抑制リングが抑えていたのは5大属性のそれぞれで、火(首) 木(右手首) 土(右足首) 風(左足首) 水(左手首)となっていました。それぞれ相性の悪い属性で抑制魔法を構成するので、まず木属性で抑えていた右足首の抑制リングを解放された火属性で破壊したのでした。

ルシウス(3) 邂逅(前書き)

ルシウス回想編はもう1話で終了の予定。

ルシウス（3） 邂逅

森の中へ逃げたソレを彼らは執拗に追ってきた。それは、パルジヤンの存在が大きかった。現状で彼の研究の唯一の成功例で今後の研究に必要であること、敵の手に渡れば危険な存在であることを指摘し、追跡魔法を使ってソレの移動先を割り出し、指示を出した。

「四肢をもうでもいい。動けなくしていただければ、無力化は起こないです」

淡々と述べるパルジヤンを、隊長はなんとも言えない顔をした。子どもの四肢をもぐのはなあ、とぶつぶつ言う。

「あれは、子どもではありません。魔力を強化された兵器です。並みの魔術師単独では対抗できない程の力を持ちます。決して単独で攻撃したりしないよう。集中攻撃で飽和させて撃破するしかありません」

「やり過ぎると死んじゃうんじゃない？」

「やむを得ません。逃亡されるよりは死体を回収できた方がましです」

おおこわ、と肩をすくめつつ、隊長は部下に指示を出し、組織的な山狩りがおこなわれたのであった。

／＊／

疾る　　森の中を、獣が疾る。

後ろには追手。振り切ったと思っても、すぐに先回りされ、攻撃

を受ける。

木を吹き飛ばし、岩をえぐり、 火弾 が、 風刃 が、 雷槍 がソレを襲う。

兵器として調整されていたソレに防御系魔法の知識はない。攻撃系魔法で相殺・はじき返しつつも避け切れない。肌が焼かれ、切り裂かれ、徐々に体力が削がれていく。

そして、ついに追い詰められた。

前にはパルジャンと隊長を先頭に敵魔術師部隊。後ろは崖。夜の闇の中では底の様子は見えない。

「おとなしく戻れ、4号」

パルジャンが呼びかける。ソレは唸った。

「僕は、…4号なんかじゃない！」

そう叫ぶと、崖に身を投げた。

／＊／

早朝、目覚めのいいシンシアは水汲みの桶を持って川まで来た。日は昇りきっていないが、空気は澄み、今日も天気は良さそうだ。ふんふんと鼻唄を歌いつつ、川に桶を突っ込む。

汲み上げようとした手が止まった。

少し上流、中央の岩に乗り上げるようにして倒れている人影

子どもに気がつくや、シンシアは桶を放り出し、上着を脱ぎ捨てた。

ためらうこともなく川に飛び込み、岩に向かって泳ぐ。幸いこのあたりの川の幅は広く、流れは緩やかだった。だから、岩に引っかかったこの子どもも流されずに済んだのだろう。

気を失っているその子どもを脇に抱えて、元の岸に戻るまで、それほどの時間はかからなかった。

／＊／

コトコトコトコト スープを煮込む音を聞きながら、寝具の中でまどろむ。豆を煮込んだ薄いスープ。裏の畑で取れた野菜が入っている。丸く焼いた穀物の粉を、ちぎって漬けながら食べる、毎朝のおなじみの母さんのメニュー。

さあ、朝ですよ。起きなさい。

心地よくて寝たフリを続ける僕に母さんが声をかける。いつもの、ずっと続くと思っていた日常。

母さんが僕の名前を呼ぶ

「目が覚めたかい？」

開いた目に映ったのは、母さんではなかった。赤茶の髪に茶色の瞳をした見知らぬ女性。

「あたしの名前はシンシア。坊やの名前は？」

母さんのものではない、でも優しいほほ笑みでその女性^{むすめ}は、僕の名前を尋ねた。

「僕の名前は　　ルシウス。ルシウス・オーランド」

僕はようやく僕の名前を取り戻した。

／＊／

シンシアは旅の治療師だと言った。戦争で生き別れになってしまった子どもを探して旅をしているのだと。この村には、立ち寄ったついでに路銀を稼ぐためにしばらく小屋を借りて滞在しているのだと、問わずもがな語った。

ルシウスのことを問い詰めることはなかった。

体に多数ついていた火傷や切り傷　　その一部には致命傷に近いものもあった　　が治療する間もなく、通常ではありえない速度で回復したことも、ぼろぼろになった上着に　　追跡子　　遠くへ離れても術者にかけられた物の場所を教える魔法がかけられていたことも、少年がただものではなく、おそらくそれゆえに追われていることを示していたが、まずは回復が先決と、何も聞こうとはしなかった。

追跡子　　のかかった上着は洗濯のついでに下流に流してきたが、はてさてどれくらいもつものか。ぼちぼちこも引き払い時かねえ、とシンシアはのどかに呟くと荷物をまとめはじめた。

／＊／

常人をはるかに凌ぐ自然治癒力に加えてシンシアの治療によって、ルシウスの傷は1日という短期間でほぼ全回復していた。シンシアの料理で体力・気力も回復した。

逃げなければ。

パルジャンが彼を諦めることはない。逃げ切れる自信も、行く宛てもない。だけれど、あそこへ戻ることはできなかった。自分がモノ
実験動物でしかないあそこへは絶対に戻りたくない。

だから、このままここにすることはできなかった。おそらくすぐにパルジャンはここを突き止めるだろう。シンシアから聞いて、ここは、ルシウスが囚われていた施設から山一つ挟んだ裏側だとわかった。徒歩でなら2日かかる距離を、流されてきたらしい。

「僕はもういかないといけません」

お世話になっておきながら何もお返しすることもできず心苦しいのですが、ここにいと迷惑がかかるから、と言うルシウスに、シンシアは頷いて服と、バックパックを渡した。

「準備はできてるよ。近所からあんたに合いそうなサイズの子ども服をもらってきておいたから着替えな。こっちには、着替えと食料少々、あとロープとかの道具が入ってる」

あ、あと私も行くから。と、自分のバックパックを見せてシンシアはにやりと笑った。

「なぜ…」

絶句するルシウスの頭をぽんぽんと叩く。

「子どもは大人に頼っていいもんだよ。あんたは子どもなんだから、もつと甘えていいんだよ」

「子ども…」

ルシウスがなぜか複雑な顔をして何かを言おうとしたが、しつとシンシアがそれを制した。目が細められる。

「まずいね。困まれたみたいだよ」

ルシウス(4) 旅の仲間(前書き)

これで、ルシウス回想編終わりです。お待たせしました^^;

ルシウス(4) 旅の仲間

時は少々遡る。

「下流で回収できたのはこの衣服のみでした」

斥候の差し出した濡れた上着を見て、パルジャンが頷く。

「追跡子に気が付き脱ぎ捨てたか。だが、この流域にいることは間違いあるまい。兵器とはいえ手負い、それほど遠くへ行ったとは思えない。近郊の村への聞き込みはどのような状況か」

「聞き込みに行った数部隊が帰ってきている。報告させよう」

いくつかの村へ放った斥候から話を聞くと、その中のひとりからそれらしき子どもを見かけたという報告があった。

「金髪の少年を旅の治療師が運んできたらしいと、その村人から聞き出しました。その治療師が滞在しているという小屋への案内の手筈も整えてあります」

「でかした」

隊長はパルジャンに頷きかけると、休憩をしていた部隊に号令を出した。

「目標を捕捉した。これより捕獲作戦を再開する。目標が滞在中と見られる村へ進軍、到着後の指示は追っておこなう。10分にて野営の撤去をおこない、進軍を開始せよ」

「おうー！」

野営地がにわか慌ただしくなった。

／＊／

昼過ぎには小屋の包囲が完了した。隊長がパルジャンに作戦を相談する。

「投降を呼びかけますかい？」

「いや、前の結果を鑑みるに、反撃の機会を与えるだけだろう。奇襲攻撃で取り押さえた方がいい」

「なるほど。一緒にいるという治療師の女はどうします？」

「好きにしてくれていい」

「了解」

振り返って部下に作戦指示を出す。

「正面扉、裏口、窓2か所から同時突入をおこなう。」

正面扉はA班、裏口はB班、前方窓はC班、後方窓はD班の担当とする。各班は突入1名、後方支援魔術要員2名で構成。面子の選定はガルに任せる。

油断しているところを奇襲で総攻撃し、無力化を図る。が、無理はせず、反撃が激しいようならば一時撤退すること。

手加減は不要。目標少年および一緒にいると見られる女性の生死は問わない」

いけ、と伝令を走らせ、準備が整うのを待つ。じりじりとした時間が過ぎて行った。

／＊／

「まずいね、囲まれている」

窓からそつと覗き、複数名がじわじわと寄ってきているのを確認する。

「突入してくる気かね」

服を着替えたルシウスもそれを視認して、難しい顔になる。迎撃して突破するにも数が多い。自分だけならともかく、シンシアは攻撃に耐えられない可能性が高い。たとえ自分ひとり逃げたとして、シンシアが捕まっては意味がない。

「裏口もダメだね。完全に囲まれてる」

シンシアの表情も厳しい。が、子どもに不安を与えてどうする、と思ったのか、無理やり笑ってみせた。ルシウスの表情がさらに厳しくなるだけだったが。

／＊／

20分後、部下が配置についたことを確認して、合図を送る。

扉と窓を吹き飛ばし、12名が小屋へ突入した。

戦闘開始。

の予想された爆音は響かず、1名が慌てた感じで正面から出て

来ると、叫んだ。

「目標いません！もぬけの殻です！！！」

「なんだと!？」

出入りは監視していたはず。いったいどこへ？

パルジャンは小屋へ入ると魔力の残滓を探った。突入で乱れてはいるが、何かの魔術を使った跡はある。気づかれずに移動する…転移魔法か。しかし、転移魔法は転移陣へしか行けないはず。4号が知る転移陣はただひとつ…

「あそこか」

／＊／

ルシウスたちは、パルジャンの推測通り、研究施設へ戻っていた。すかさず、土の破砕魔法で使った転移魔法陣を破壊し、パルジャンが転移して来れないようにする。

見張りが2名残されていたが、これもルシウスが弱めた雷撃で個別に倒し、縛り上げて部屋に放り込んだ。

そのまま逃げるのかと思いきや、パルジャンの執務室に戻り、研究報告書や魔術書を手早く袋に詰め始めるルシウスに、シンシアは呆れた。

「子どもにしちゃっぴかりしてるねえ」

と思わず感想を漏らすシンシアに、ルシウスが一瞬固まる。

「ええと、今まで言う機会がなかったんですが、そのですね」

手を止めて、シンシアに向き直る。何事かと首を傾げるシンシア。

「こっ見えても僕、18歳なんですよね」

意味が頭に浸透するのに一拍かった。

「はえええええ？」

間抜けな声が執務室に響き渡った。

／＊／

それが、2人での長い逃亡生活の始まりであった。

繋がる絆（前書き）

戻りましたが、ある意味ハード展開続行です）、・、（）。

繋がる絆

「それからもシンシアには随分お世話になったんだよね」

ほら、僕って攻撃一辺倒で、治癒系魔法も防御系魔法も使えなかったからさ、とルシウスは笑った。

そのシンシアという女性が、アイラのひいおばあちゃんだと言う。ルシウスの語る過去があまりに波瀾万丈すぎて、アイラはどう反応したものが戸惑っていた。

「だけどさ、僕に付き合うことで、自分の子ども探しの方はうまくいかなかったんだよね。シンシアはちゃんと付き合いながら探しているって言うってたけど、逃げたり隠れたりしたら、やっぱり時間取られちゃうじゃん。結局、最後まで見つからなくてさ…僕、それでもずっと探してたんだ」

シンシアが死んでも、その子どもの行方を探していたと、ルシウスは語った。

「何度も戦争があったから、死んじゃってるとは思ってたんだけどさ。僕が諦めたらシンシアに悪い気がしてね」

だから、アイラを見つけた時は、涙が出るほど嬉しかったのだ、と言った。

「ちゃんと生き延びて、アイラのお父さんを生んで、アイラを育てながら天寿を全うしたって聞いて、よかったなあって」

シンシアも天国で喜んでるよね。だけど、僕が報告する前に再会しちゃったんだろうけど。とルシウスが困ったように笑う。

「まあ、だからね」

アイラは僕を頼ってくれていいんだよ、とルシウスは言った。

「アイラは子どもなんだから、もっと甘えていいんだよ」

それは、シンシアが僕に言ってくれた言葉だったから。

「でも…わたし、魔法使えなくなっただからここにいちゃいけない…」

ひぐひぐと泣くアイラの頭をぽんぽんとルシウスが撫でる。

「魔法が使えようと使えまいと、関係ないさ。僕がアイラを守るのにはそんな理由じゃない」

それに、とルシウスがほほ笑む。

「魔法だけがアイラのいいところじゃない。一生懸命なところ、親切なところ、たくさんいいところを持つてる。できることはこれから増やしていけばいいんだよ」

「私は、何も、返せ、ない…ひぐっ」

んーとルシウスが苦笑する。

「アイラは返さなくていいんだ。アイラに僕が返すのは、シンシアからもらったものなんだから。もし、それでも何かを返したいと思

うなら、それはアイラがもつと強くなって、どこかで困ってる子を見かけたら、その子に返してあげればいい」

急がなくていいんだよ、とルシウスはアイラの頭を撫でた。

「…もつと強くなって？」

「うん。大人が子どもを育てるのは、自分に何かを返してもらっためじゃない。自分が子どものころに大人からもらったものを、次の世代に返してもらったために育てるんだよ」

まあ、自分のことしか考えてない大人も多いけどね、とこれは心の中だけで考える。

泣き続けるアイラの頭を、ルシウスは撫で続けた。

/* /

泣きつかれて眠ってしまったアイラをおんぶして戻ってきたルシウスを、管理人のおばさんは責めるように見たが何も言わなかった。ベッドに寝かす手伝いをして、ドアを閉める。

「…あの子は大丈夫かい？」

「大丈夫ですよ。僕が守ります」

にっこり笑うルシウスを、やはりうさぐさそつに見るおばさんであった。

/* /

「マリエル、頼んでいた結果は出てるかい？」

「こちらに」

水の塔の執務室に戻ってくるなり、口を開いたルシウスに、書類を差し出す。

「さすがは、名補佐官のマリエルちゃん。仕事早くてかつこいいね。そんなあなたにじびれるあこがれるっ」

「なんですか、それは。しばかれないんですか」

いつもの漫才をしながらも、書類をめくって中身の確認をするその目は鋭い。

「現地への移動経路の確保は？」

「借り上げた建物に、転移陣を設置済みです。いつでも、移動可能です」

「了解。転移陣のコードを。移動する」

「面会の手配をいたしますか？」

「頼む」

「はい」

てきぱきと指示を出すと、マリエルから転移陣のコードを受け取る。即座に、転移魔法を詠唱しようとして、ちよっと考えた。

「着替えてくるから、面会の手配しといて。そうだね、父親だけ呼んでおいて」

「了解しました」

／＊／

小一時間後、ルシウスは、パスク村 アイラの生まれ故郷の村

で、アイラの父親と向かい合っていた。衣装は珍しく、塔の長としての正装である。きんきらで重たくて動きにくいので好きではないのだが、権威をちらつかせたいときには役に立つ。

「こちらで調査した結果です。ご覧ください」

恐る恐る受け取った書類をめくるにつれて、アイラの父親　マルキスの顔が青ざめていく。

「うすうすは、お気づきだったのでしょうか？」

「…はい」

読み終わったのを見計らって声をかけると、マルキスはがっくりと肩を落とした。

「奥さまが、アイラ嬢を、いやアイラ嬢だけを嫌っていることもご存知でしたよね」

うう、と呻く。

「どうされますか？奥さまを選ばれるなら、アイラ嬢は正式に私の養子として迎えます。その場合は、今後一切の関わりを持たないことをお約束していただきます。手切れ金はお渡ししましょう」

「そ、そんな…」

やつれた顔をすぐるようあげるマルキスを見るルシウスの目は冷ややかだ。

「アイラ嬢を選ばれるなら、魔術師の島に住居と職を用意しましょう。ただし、奥さまとの縁は切っていたたく。ああ、奥さまには手

切れ金をさしあげますよ」

どちらを選ばれますか？と、ルシウスは内容とは裏腹の爽やかな笑みを浮かべながら再度聞いた。

繋がる絆（後書き）

名称ゆらぎ調整中。

対決（前書き）

お母様の反応は、おおむね修羅場スレのテンプレどおりだったり。

対決

「どついうことよ!」

その女が怒鳴りこんできたのは、それからまた小一時間後のことだった。のんびりとお茶を飲んでいたルシウスが、ゆっくりとカップを戻して、女を見る。

室温が下がった気がした。

「アイラ嬢のお母様ですね。お座りください」

ひるんだ女　レイラを促して、正面に座らせる。お茶を、という指示にマリエルが新しく入れたお茶のカップをその前の机に置く。

「だから…なんで、あの人が魔術師の島へ行って私が別れないといけないのよ!」

「2人のお子さんは、お母様がお連れにならない場合は、引き取られてもよいそうですよ」

淡々と言葉をつなぐ。

「だからっ」

「たとえ血がつながってなくても、これまで親子として暮らしてきた以上は、と」

意味が浸透して、レイラの顔が青くなった。

「な、何を言って…」

「つじつまを合わせておけばばれないと思いましたが？子どもを放り出して男と遊び歩いておいて、誰にも見られてないと、思ってた？」

先ほどマルキスに見せた書類を、前の机に置いてレイラの方へ押しやる。

「近隣の方々、お相手の方　ダンとおっしゃいましたっけ、ご本人とその周囲の方々からの聞き取り結果、そしてあなたのここ数カ月の素行調査の結果です」

レイラがわなわなと震え、いきなり書類を取り上げると破り捨てようとする。が、堅くて破けずに顔が赤くなるばかりだった。

「あーそれ強化魔法かけてあるんで。まあ、元々羊皮紙なんで破きにくいと思いますけどね」

「嘘よ！こんなのでっちあげよ！！！！」

破くのを諦めたレイラはそれでも忌々しいと言わんばかりに書類を床に叩きつけて、足で踏みじった。

「旦那さんにとっては嘘であってほしかったでしょうねえ」

髪を振り乱してげしげしと踏みつけるレイラを冷ややかに見ながらルシウスが相変わらず淡々と答える。その言葉にレイラが固まった。血走った眼をルシウスに向ける。

「…あの人に見せたの？」

「お見せした上で、ご決断いただきましたよ？」

声にならない悲鳴をあげて、レイラがルシウスに襲いかかる。

「茨縛」

かぎづめのように曲げた爪がルシウスに届く前に、空中に出現した茨のツルがレイラを拘束した。

「速いね」

「護衛も兼ねておりますから」

「ありがとうございます」

お茶を飲みながらのやりとりに、レイラがなおも歯を剥いて暴れる。

「化け物！悪魔！お前たちの言うことをあの人が信じるもんか」

「レイラ…もうやめよう…」

やりとりを入口で途方に暮れて見ていたマルキスが、ようやく声をかけた。

「あなた…ちがう…ちがうのよ」

「ずいぶん前から知ってたんだよ。お前が、アイラからの仕送りを男に渡していることも、知っていた…知ってて、知らないふりをしていた」

「うそ…うそよ…」

「私たちはずっと昔に終わっていたのに、終わりにする勇気がなくて、みんなを不幸にしまったね」

泣きそうな笑顔で妻と呼んでいた女に笑いかける。だが、その思いはその女には届かなかった。

「そうよ、あなたが悪いのよ！あなたが、あんな、あんな化け物を私に産ませるから！あいつが、あいつがいなければ、私だっ…て！うぐっ」

ぎりつと茨のツルが締まった。マリエルの目にほのかに殺意がひらめいている。それを手で制しつつ、ルシウスがへに入る。

「まあ、そういうわけですので。奥さまには申し訳ありませんが、今後一切アイラとその家族には関わらないでいただきます。手切れ金は差し上げますので、今後のご生活にお役立たせください。もし、お約束に関わらず、アイラの周囲に姿をお見せになった場合は…」

言葉を切つて、レイラを見つめる。毒づこうとしていたレイラは、言葉をとぎらせ、真っ青になった。

「ご理解いただけただようで幸いです」

では、お引き取りください。と、ツルを解き、退出を促すころにはレイラは燃え尽きたようになっていた。

「大丈夫でしょうか？」

「あの優柔不断な父親は、泣き付かれたら揺らぎそうだから、さっさと確保して引き離してしまっただほうがいいな」

別に2人でぐだぐだになるのが、本来なら知ったことじゃないが、あれでもシンシアの孫だし、アイラの父親だからな、とルシウスが肩をすくめる。

「了解いたしました。至急手配いたします」

「さすがマリエルちゃんかっこいい」

「それいい加減やめないとしばきますよ」

ハッピーエンドとは言えないかもしれない。だけれど、守りたいものを守るために、できることをするだけだ。

すっかり冷めきったお茶の最後の一口を流し込むと、帰還のために立ちあがった。

大団円（前書き）

とらふこととて置む！

大団円

数日後、アイラの元へ父親が弟と妹を連れてやってきた。これから、魔術師の島で暮らすのだという父親に、アイラは驚きつつ喜んだ。

「えっと…お母さんは？」

アイラの問いにマルキスはさびしそうに笑った。

「お母さんは、心を病んでしまっただね。実家へ戻って療養することになったんだよ」

「そう…」

複雑な思いだったが、ほっとしたのも確かだった。

父親が新しく開いた小物の店、それを手伝いながら母親代わりに弟や妹を育てる日々に、アイラ自身がゆっくりと癒されていった。

／＊／

「錬成」

床に描いた魔法陣が光り、中央に置いた材料が一つにまとまっていく。

光が消えるとともに、中央にはでき上がっていた「魔術師の杖」が出現した。課題は成功した。

「やったー！できたー！」

できあがった「魔術師の杖」を手に跳ねるアイラ。

ばん！と実習室の扉が開いて、招かねざる客が飛び込んできた。

「あいらちゅああああん、おめでとおおおー！」

涙と鼻水をまき散らして抱きつこうとする残念すぎる人を、アイラはひらりと避ける。ここ1年ですっかり慣れたらしい。

「避けるなんてひどいよう」

すかつた拳句、床に盛大なスライディングキスをかましたルシウスが、えぐえぐと文句を言った。

「乙女に抱きつくのはセクハラです」

「セクハラです！」

遅れて姿を現したマリエルが、冷やかに評する。アイラがそれに唱和した。

「ともあれ、錬成成功おめでとう。それを提出しますか？」

「はい、お願いします」

できた「魔術師の杖」をマリエルに渡すアイラの表情は緊張していた。

「水系魔術の増幅効果は中といったところですね。錬成は安定しますね。そうねえ」

マリエルがにっこりと笑った。

「80点と言ったところかな。合格です。おめでとう」

緊張に固まっていたアイラの顔が、ぱあっと明るくなった。

「ああああ、ありがとうございます!」

杖ごとマリエルの手を握り締め、跳ねる。

「マリエルばかりずーるーい!。僕が採点官もやりたかったのに」

そしたら、アイラに手を握り締められるのは僕だったのにーと、床にのの字を書いていじけているルシウスに、マリエルが呆れた。

「そういうことばかり言ってるから外されるんですよ。いい加減アイラ離れしてください」

「してください!」

えーっと口を尖らせるルシウスに、2人は顔を見合わせて笑った。

/* /

家でもお祝いが行われた。父親が作った料理に、買ってきた焼き菓子。

「アイラ、1級合格おめでとう」

「おねーちゃんおめでとー」

家族のお祝いの言葉に、アイラが頬を染める。

「ありがとう。これもみんなのおかげだよ」

ぎゅうと弟と妹を抱きしめて、嬉しそうに笑った。その様子を目を細めて父親が見ていた。

「アイラはこれからどうするんだい？魔術師にはなるんだろうけど、その後は何をしたいんだい」

父親がふとアイラに尋ねる。

「うん、あのね。魔術師の島には先生が不足してるんだって。これからもつと魔術師候補の子どもたちが増えていくんだけど、その子どもを教える先生が増えないんだって」

だからね、とアイラが続ける。

「私、初学者の塔で先生をしたいな、と思ってるの。あ、まだ、思ってるだけなんだけど」

照れて、手に目を落とす。父親の微笑みが深くなった。

「とてもいい夢だね。アイラにとっても似合ってる。アイラならきつとなれるよ」

「うん！」

晴れやかな笑顔は、とてもまぶしかった。

／＊／

「アイラちゃん！その夢は必ず僕がかなえさせてあげ…あた、あた、あた、あた」

「覗き禁止。この痴漢。セクハラ男。変態。ロリコン」

「マリエルちゃん、やめて！それマジで死んじゃう…！！！」

水の塔で惨劇があったとか、なかったとか…

エピソード（前書き）

エピソードでやんす。

エピソード

初学者の塔の中庭で、木を背にその女性は本を読んでいた。

本に影が落ちたので、ふと顔を上げる。このところ彼女になついている少女が立って、本を覗きこんでいた。

「この本に興味があるのかな？エリー」

名前を呼びながら微笑みかける。

「ねえ先生」

だが、少女が訊きたかったのは他のことだったようだ。

「先生はなぜ、先生になったの？」

お勉強ができるから？と首をかしげる。女性の笑みが深くなる。

「それはね。もらったものを返すためよ」

「もらったものを返すため？」

エリーの眉がしかめられた。

「先生が先生になるまでに、先生はたくさんのおもちゃ、お父さんやお母さん、助けてくれた多くの人たちから、もらってきたの。そのもらってきたものを、エリーやみんな、そしてこれから教えることになる沢山の子たちに返したくて、先生になったのよ」

「先生の先生には返さなくていいの？」

返そうとしたら、断られてね、と彼女が笑う。エリーたちに返してあげてくれて頼まれたんだよ、と、エリーの頭をぽんぽんと撫でた。

まだわからないかもしれないけど…

「もし、エリーが私に何か返したくなったら、それはいつかエリーが大きくなったときに、エリーの子どもや、周りで困ってる子どもに返してあげてね」

そうやって、絆は繋がっていくのだから。

少女は、戸惑いながらも頷いた。

「いい子ね」

女性 アイラは、少女の頭をくしゃっと撫でるのだった。

< F i n n >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1282p/>

繋がる絆

2011年10月8日08時31分発行